著作紹介

# 柴田隆子
# 『オスカー・シュレンマー——バウハウスの舞台芸術』

（2021年、水声社）

20世紀初頭のドイツで「芸術と技術の新しい統一」を掲げ、建築とデザインの教育・研究機関として有名なバウハウスに、「舞台」を扱う工房があったことはあまり知られていない。本書は工房の2代目マイスターであったオスカー・シュレンマーの理論と作品から、空間造形としての舞台芸術について考察したものである。

第1章は少し遠回りをして19世紀後半に発明された電気照明から始めている。上演を一つの芸術ジャンルとして捉えようとする考え方が生まれてきた背景には、この電気照明に象徴される視覚優位の文化や世界観の醸成がある。表現素材として多くの技術者や芸術家たちが劇場空間に注目していく中で、バウハウスもまた「生産と芸術の一体化の象徴」として総合芸術である舞台芸術を探究したのである。

第2章は執筆当時の学術分野の言説に目配りしながら、シュレンマーの芸術理論「人間と芸術的形象（Mensch und Kunstfigur）」を紐解いている。彼が時代の兆候としてあげる「抽象」は、抽象絵画、ゲシュタルト心理学、非ユークリッド幾何学など様々な領域で議論されている概念である。ヴォリンガーやカンディンスキーの抽象概念を独自に展開し、舞台上には三次元の幾何学的法則による抽象空間と身体による主観的な創造空間があるとシュレンマーはいう。この創造空間を生み出す人間について、シュレンマーはバウハウス内外の人的交流や学生らとのワークショップを通じてさらに思考を深めていくのである。

身体によって感覚的に捉えられる空間への関心は、シュレンマーに限らず、バウハウスの基礎教育全般に共通するものであり、外部講師を招いての連続特別講義「統一としての人間」なども催されている。さらにドイツ・ロマン派絵画や哲学の理論、表現舞踊のルドルフ・フォン・ラバンやマリー・ヴィグマンらの取り組みの影響などもシュレンマーにはみられる。第3章ではそうした影響が反映された授業構想ノートやそこに記された参考文献から、彼の「人間」の授業を考察し、第4章ではそうした座学と結びついた舞台ワークショップでの取り組みとその成果について論じた。

バウハウスを去った後も舞台芸術教育の普及に努めたシュレンマーだが、ナチス政権下で退廃芸術家のひとりとされたまま病を得て亡くなったため、その後の作品や理論は構想段階で止まっている。第5章では、代表作『トリアディック・バレエ』の変遷から始め、バウハウス以降のシュレンマーの活動を示した上で、複数のパースペクティブと位相空間を軸とする理論的展開についての仮説を提示した。

シュレンマーは1980年代にパフォーマンスの先駆者として紹介され、セノグラファーの初期理論家としても取り上げられてきたが、本書では身体と空間の位相による創造空間を扱う「舞踊」に新たな理論的地平を拓いた人物のひとりとして位置付けている。身体の生み出す空間に注目したアプローチは、身体とのコミュニケーションとして広義に舞台芸術を捉える際にも有効であろう。

（柴田隆子）